



## 主の洗礼 (ルカ 3:15-16,21-22)

イエスに倣い、人々の架け橋となる

主の洗礼の祝日を迎えました。主の降誕に続く降誕節は今日までです。イスラエル巡礼をした時、私が訪問した御公現後も、ベツレヘムとかあちこちで馬小屋が飾られていました。私もかつて、馬小屋のセットを残して、そこに洗礼者ヨハネとイエスの御像を置いて、イエスの洗礼はこんな雰囲気だったかなあと当時の教会の皆さんと思い巡らしたことがあります。

子供達はお年玉はいっぱいもらったのでしょうか。私も評議会から過分なお年玉をもらいました。また個人的にもいただきました。子供達はお年玉はどんなふうに使いますか？私はメガネを買うことにしました。5年以上このメガネを掛けていますが、疲れている時に文字がダブったりして、お説教を考える時に気になるようになりました。

もちろん一個人の中田輝次が一月に何を買おうが、一月に何をしようが、知ったことではないと思うでしょう。ただ主任司祭の中田輝次神父がメガネを買い直すとなると、「よりよい仕事ができるようにつなげてくれるのかな」と考えてくれるのかなと思って、日常のことをちょっと挟んで話しております。

さて与えられた福音朗読の、イエスが洗礼を受ける場面は、イエス一人を注目させていると言うよりも、イエス以前の群衆とのつながりに目を向けさせているように思います。「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。」(3・21-22) イエスの洗礼だけを描くのではなく、イエス以前に洗礼を受けた人も同時に描いているからです。

洗礼者ヨハネが授けていた洗礼は、「悔い改めの洗礼」でした。後にイエスが授ける「聖霊による洗礼」の前触れと言ってもよいでしょう。すると、前触れの意味合いがあるヨハネの洗礼は、いよいよ始まる聖霊による洗礼によって、過去のものとしてされてしまうわけです。ではヨハネの洗礼を受けた人々も、イエスによって過去の人としてされてしまうのでしょうか。

ある意味、そうなるかも知れません。けれどもイエスは、ヨハネの洗礼を受けることで、イエス以前のすべての民を受け入れたのです。私たち今の時代の人々は、父と子と聖霊による洗礼を受けて神の子とされますが、イエス以前の人々はそうではありません。そのため、イエスが彼以前のすべての民を受け入れるしるしとして、ヨハネの洗礼をお受けになったのではないのでしょうか。

それはたとえて言うなら、川を隔てて分かれていた場所をつなぐ橋のようなものです。それまでつながりを持っていなかった兩岸の人々が、橋のおかげでつながります。人と人とを結ぶ絆もそうです。イエスは彼以前のすべての民と、イエス以後のすべての民を、人としてつないでく

ださったのです。

イエスが受けた洗礼を、これまでの人々とこれからの人との架け橋、絆と考えるなら、イエスを模範とする私たちが今週学ぶべきことも見えてきます。私たち一人一人が、「これまで通りでずっと行こう」という姿勢に留まるなら、これからの人々との架け橋になることはできません。イエスは「私が架け橋となった。私が模範を残した。あなたがたも同じようにしなさい」と呼びかけておられます。

大人になって洗礼を受ける人は、幼い頃から洗礼を受けた人が体に染みついて覚えていることがどうしても難しいと思います。幼い頃からロザリオの祈りを唱えてきたこととか、大人になって洗礼を受けた人にはなかなか入っていけないと思うのです。

その際「見よう見まねで覚えなさい。私たちもそうだったのだから」という態度は、架け橋になる人の態度ではないと思うのです。どこがなじめないのか、どうしたらなじめるのか、あと一步踏み込んで手伝ってください。その努力が、イエスに倣って架け橋になろうとする姿だと思います。

信仰生活の架け橋になってお役に立てる人は、もしかしたらそれ以前にもう一つ心がけている人かも知れません。日常生活です。日常生活で「どこがなじめないのか、どうしたらなじめるのか」あと一步踏み込んで手伝ってくださったおかげで信頼を得て、「信仰の面でも教えていただく」という気持ちになり、日常生活と信仰生活の両面で架け橋になれるのだと思います。日常生活と信仰生活は、切っても切り離せないのです。

「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。」人口減少や少子化、都市と地方の格差、さまざま聞こえてくることは私たちの心を塞ぎ、ため息の元となることばかりです。けれどもイエスの模範に倣い、架け橋となるわざを根気強く続けましょう。

天が開ける。聖霊が降る。これは現代でも起こります。イエスがすべての人の架け橋となってくださったのですから、私たちの教会にもしるしを与えてくださることを信じて、私はどの場所で架け橋となれるのか、探し求めることにしましょう。